

侍とおやじの歌比べ

語り手…木野谷タマさん(多井、明治 19 年生まれ)

あるところに炭焼きじいさんが炭を^{いっか}一荷負って下るところを、ちょうど、下の方から侍だったやら、何だったやら、馬に乗って上がりかけて。で、炭焼きじいさんが頭がみんなてれて、後ろにちょっと髪があるやつをちょんまげに^い結ってござったさあなに、その侍が、

「じいよ、じいよ、おまえに一句あげよう」てて、

「はい」てて言ったら、旦那が、

^は禿げ山に なぜに鳥居が見えぬやら すこしをするに髪がますます

てて言って、一句あげたさなに、炭焼きじいが、

「はい。旦那、あんたにも一句あげましょうか」て言ったら、

「おおおお」てていって言われたら、その炭焼きじいが言うには、

^{こせき}名所古蹟は多けれど 花(=鼻)のないのが寂しかるらん

てて言って、もどされたさで、で、けえ、そこで別れて、旦那が帰って言われるにや、

「今日は、け、炭焼きじいに出会って、炭焼きじいが頭がてれちよったもんだけん、一句やらあかてて言って、けえ、一句やったら、禿げ山になぜに鳥居が見えぬやら、すくしをやるに髪(=神)がますます、言ってやったら、旦那ああんたにも一つもどしましょうか、てて言うで、おおおお、てて言ってもらったら、名所古蹟は多けれど

花(=鼻)のないのが寂しかるらん、てて言ってもどした」てて言われたら、かんさん(おかみさん=奥さん)が、

「何と口惜しいことだったなあま、いかにも口惜しかったなあ」てて言ったら、

「おまえは口惜しいか、わしゃ鼻ほしいわい」てて、旦那が言われた。そんな昔。

■収録：昭和48年6月23日

■聞き手：酒井董美

【解説】関 敬吾『日本昔話大成』で調べると笑話の「狡猾者譚」の中に「おどけ者」の項があり、その「鼻なしの歌」に該当しているようです。

以下に引用しておきます。

六〇八 鼻なしの歌

^{むこ}鼻かけの男(智)が^{はげあたま}禿頭(嫁)を神社に神(髪)のないのが残念、禿頭は山に花(鼻)がないのが残念といってからかう。

木野谷さんの話では、侍の鼻がかけていたのをからかったようでもあり、あるいはおかみさんとの会話からおやじさんの鼻がかけていたので、おやじがそちらを苦にして侍の歌に返したのか、そのあたりがやや不明になっています。しかし、全国的に見られる「鼻なしの歌」の話型が、ここ海士町に存在していたことが、この話で証明される貴重な意味を持っているのです。



イラスト／福本隆男(崎出身、三郷市在住)

隠岐島前高校郷土部収録
海士町の民話から (33)

■再話・解説

酒井董美(ただよし)

(山陰民俗学会会長、
元隠岐島前高校郷土部顧問)